

二回の盛観も期待し難きに非ればなり、第一回は全然國民的會合なりき、第二回は果して如何なる可き、世間自ら豫言者のあるあらむ。

◎宗教家大會見聞雜記 (教界時事)

別報の如く同會愈去る十五日淨土宗々務局の樓上にて開かれたが此會合には淨土宗の黒田氏等が最熱心に盡力された、此會の目的は宣言書にある通り今日露交戦の真相を中外に明かにするに在るのだ、一體かかることは理窟からいへば必要ない譯だが、歐羅巴特に露西亞にては黃禍説といふ妄説を唱へて、日本人は支那朝鮮などと、同じ黄色人種であるから今度日本が戦争に勝つ時は東洋の盟主となり、清韓と連合し亞細亞人を一統して歐羅巴に攻め寄することになるやも知れぬといひて歐洲の他の國民の心を動かさんと勉めて居る、又或る者は彼我宗教の異同なる所から佛教國と基督教國との戦の如く言ひなし中世の十字軍(基督教と回々教との戦争)の如く言ふて居るものがある、是れは西洋に限らず日本にも右の如き思想を持って居るが皆無ではない様である、それは大變な間違であるが苟且にもかかる思潮があるとすれば今回の如き催しは無用ではない、否大に必要である

と思ふ。

かかる性質の會だから集る者の中には僧侶もあり神官もあり、宣教師もあり、普通人もあり、英人もあり、米人もあると云ふ様な工合で會場の光景は一種異様であつた、併し平素は動もすれば排斥反目する異宗派の人が一堂に會して親近するといふのは實に愉快であつて、かくて宗教本來の面目が現はるといふものである、何とかして今後もかかる會合を平時に於ても催したいものだ。

當日の演説者は顔振を見ると神佛耶の三教から二名づつであつた、其順序も年齢の順序といふのであつて平田氏が最初に柴田氏が最後であつた、處で兩人が共に神道の代表者であつた、勿論偶然ではあるが首尾能く神道で始末が付いた、と考へると一寸面白いではないか。

各宗の代表者といふのだから何れも智徳辯才の方々であつた、尤辯士も日本宗教家大會といふ看板を掲た檜臺に於ての演説であるから大に力んで見えた點もある。

佐治氏が温順平和なる態度を以て諄々と佛耶兩教の本尊思想の變遷を説いて接近といふて宜いか、融和といふてよいか、兎に角調和の必ずしも不可能の事でない。

いと云ふ如きことを主張されたが、一般の聴衆は如何感じたか知らぬが、吾人は大に同感である、吾人は今日の基督教は殆んど佛教と間髪を容れない程進んで居るを認めて居る。

村上氏の宗教と戦争との關係論は別に嶄新の主張といふことはないが大に聴衆に感動を興へた、氏が宗教は元來戦争に對して超然たるべきものなるも、宗教は國家と離ること能はず、從て國家が避くべからざる戦は宗教は非認又は是認する譯もない、又異教の故を以て武力を以て服する——武器を以て信仰を強ゆるの理由なきこと即ち宗教上の戦争の合理的なることを道破されたのは大賛成だ。

大内青巖氏の黃禍説は實に有益に且つ面白かつた、氏は博識家であることは世人の知つての通りだが、今回の演説などは餘程身が入つて居つた。

イムブリー氏祝詞の中に今回の日露の交戦を古代にて希臘が波斯と交戦して屈せざりし事例に比し、希人は昔し歐洲安全の爲めに大敵波斯と戦ひ、今は日人東洋平和の爲に強敵露西亞と戦ふ、日本人の愛國心は古希臘人の愛國心と一なりと賞讃し、最後に日本の海軍は既に日本のサラミスの(希が波斯の海軍を破りし場處)海戦にて勝てり、併し戦争の前途は尙遠し、昔し希臘のスパルタの勇士三百は、旅人

よ往て故郷の人に告げよ、吾等はスパルタの國法を守りて此處に斃るてふ碑文を残して、サーマンピリーにて戦死せり、今日日本の陸軍の兵士或る者は滿洲の野の何處に於て萬々一衆寡敵せず、悲壯の最後を遂げ、朝鮮の岸頭に日本勇士の紀念碑を残すなきを保せず、大に覺悟せざるべからず、と警告せしときは、吾人は悲壯漂列の感に堪へなかつた。

尾崎氏の祝辭の中に日本は凡ての點に於て露國の閉鎖主義と反對で開放主義である併し、今回の戦争に於ける旅順港の閉塞だけは例外であるといはれたのは中々に奇警で愛嬌があつた。

千家府知事が祝辭の終に希望として、此際宗教家は戦勝の祈禱、戦死者の追弔法事を營むも宜しいが、紀念事業として山林の開拓、牧場の設置、工場の設置、此の如き殖産を力むるのが宜しい、古來の宗教家は皆此實業を力行したのである、世には勤儉貯蓄獎勵の主意を誤解し、萬事消極的に傾き、國民萎縮病に罹からむとする様がある、此際宗教家は此誤解を防ぎ、一面に失業者に職を授けることが肝要だといはれたが、吾人の平素の持論と全々同一である、吾人は戦争に眩惑されて居る本山の臨時部役員達に此主意を丸薬にして一週間許り吞ませ度思ふ。

◎宗教家大會を評す(同朋)

小野 藤太

一八六

明治三十七年五月十六日東京芝公園舊彌生館で日本宗教家大會が開かれまし
た、實に空前の出来事であり、又空前の盛會でありました、これに就て會員等からだ
ん／＼質問がありましたから、今日ここで私の意見を大略陳るのであります、尤も
時間が二十分しかないから充分なことは申されぬ。

賛成の理由

蟻の如き私が賛成とか、不賛成とかいふても、なんの影響もある譯ではない、又こ
の研究會等は宗教界ではホンノ大海の一粟、その存在すらも認められて居らぬ位
である、けれど五分の蟲にも五分の靈魂はある、私は個人として又研究會の立場よ
りして、この大會に賛成の理由を述べましよう。

第一私はこの大會が、浄土宗の主唱、黒田眞洞氏の發意であるといふことで、尤も
これには種々の訾もありませんが、それは後で辯じます、ヨリ多くの敬意を拂ふもの
であります、若しもこれが雑誌記者の發意とか、大家ではあるが、失禮の申分ではあ
るが、大内青巖氏の發意であるとすれば、私はそれ程に尊敬しませぬ、ナゼナレバ
といふて別に理由はないが、唯當日集會された二千餘人の人々が七八分通りは私

と同じこの感をもつて居つたであらうと思ふ。

第二に宗教研究會の立場からして、この大會を見ますと、一體研究會はあらゆる
宗教を研究して自己の信念を獲得し、確立すると同時に、すべての宗教の中心點、統
一點を探求して、之を發達させようといふのであるから、宗教家大會の如きは研究
會の目的の或部分が、日露戦争といふ動機により、時勢の進運上、具體的に現はれた
のと見て、差支はない、吾人が従來極力鼓吹した所の一部が先輩の手に由つて實現
され、承認されたといふてもよい、研究會たるものは單に賛成するのみでなく、須ら
く、一小白を擧げてよい。

誤解の注意

宗教家大會は日露戦争が動機となつて起つたものである、しかしながら開戦の
理由を説明するために起つたのではない、戦時戦後に於ける宗教家が如何なる態
度を執るべきかを議するの必要はあるが、黃禍説等を辯駁せねばならぬ譯はない、
若しもそれが後者の如くであれば、吾人は極力反對するのである、決つて賛成は
出来ぬのである、宗教が政治の手先となつては、それこそ大變である、國民としての
立場と、宗教家としての立脚地は自ら別である、決つて混同してはならぬ、尤も立

場は違ふが、或場合には二者が全たく一致することが出来る、唯今吾人は實に一致して居る時である、ニコライ等は一致が出来ぬ場合だ。

政府の使喚説

新聞に出て居りましたが、又實際或賛成員の如きは、この大會は、政府の使喚に出たのか、政府から金を貰ふてやつたとか、末松男の注意で發意したとかいふて居る、私は發起人でも賛成員でもない、否、そんな仲間に這入るべき資格のあるものではないが、志は決してそれ等とことならぬ、それで別に必要はないけれど、こういう流言があまりに兒戯に等しく、抱腹に堪へぬ、否、その寒しき腸が見え透くから一言戒めて置くのである、末松男が立立は二月中旬、黒田氏が發意の外部に現はれたのは三月上旬、その間二十日に過ぎぬ、此の時間で海外に往き、又海外から發信してそれが到着する餘裕がありましようか、實際末松男の來信があつたとしても、それは發意後であるのは明白である、淨土宗の近況や、黒田氏の老いて益壯なるの意氣を見れば、この位の事をやるのは當然だ、あまり焼餅をやくにも當るまい、夫から政府から金を貰ふた、これ程滑稽は世の中にあるまい、桂さんや小村さんや芳川さんが、マサカ藝者に纏頭でもくれるような譯ではあるまいし、二百か三百の金を……

己れを以て他を付度する陋とも劣とも申様なし、若し政府必要とせば他に方法あり、今度のような政略としては尤もマツイことをやらぬでもよい、否、政府のためには却つて迷惑であるのは、少しく政治を知るもの、齊しく認むる所である、政策としては尤も劣等の愚策である、政府がやつたとすれば、却つて歐米のそれに冷笑せらるるに過ぎぬのである、私はこれにつき政府のやるべきことは他にありと信じ、過般某大臣へ具陳して置いたが、それは今や著々實行せられつつある、これは遠からず、明かになります。

私は宗教の方は後進であります、政治の事は新聞の主筆位して少しは知つて居ります、ドウモ宗教界にこんどのことを政府使喚等いふ者があるとすれば、宗教家は確かに他の社會のものに比して一世紀以上後れて居ります。

要するに新聞屋がなにか求むる所あつてか、又は何か復仇の爲めに書き立てたのに迷はされたか、或は又却つて新聞屋を使喚して書かせたのかは知らぬが、賛成員となつて居つてこんなことを觸れあるくのは、實に怪しからぬことだ、多分私憤でも洩らすためであらう、ドウモ宗教家といふものは、猜疑でいかぬ、他の美事を妨害することが多い、併し發起人の中にこんな馬鹿な卑劣漢のなかつたのは實に仕

合せだ。

この外東京の各新聞には一齊に大會開催當日の状況を報道し、中には短評を挿めるものありと雖、多くは状況の記事に屬し、大會の美譽たるを讚稱するものなるを以て此には略すべし、獨り「日本新聞」は他と異り大會の政府の使嗾に出でたりと云ふ風説を信ずるらしく、筆を冷評的に用ひて平素の眞摯に似ざりし、同新聞の爲に寧ろ其輕率なりしを惜む、大會の發起人中境野氏の如きは既に此種の風説に惑はされたるものと見え、開會の一兩日前に至り、突如書面にて風説に思ひ當る處もあれば、發起人除名されたしと申來れり、當時何の風説なるか揣摩するに苦み、直に同氏に反問したりしも答を得ざりしが、「日本新聞」を讀むに至りて已に陰險者流の捏造奸手段行はれしを覺り、其言行の宗教家ならざるを哀憐に堪へざるなり、而して大會の政府との關

係は前に既に之を述べ又世の新聞其妄を辯ず、故に此には之を言ふを省くべし。

宗教家大會彙報終

明治三十七年七月八日印刷
明治三十七年七月十一日發行

宗教家大會彙報

定價金參拾五錢

編者 大日本宗教家大會事務所

印刷行 者 金港堂書籍株式會社
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

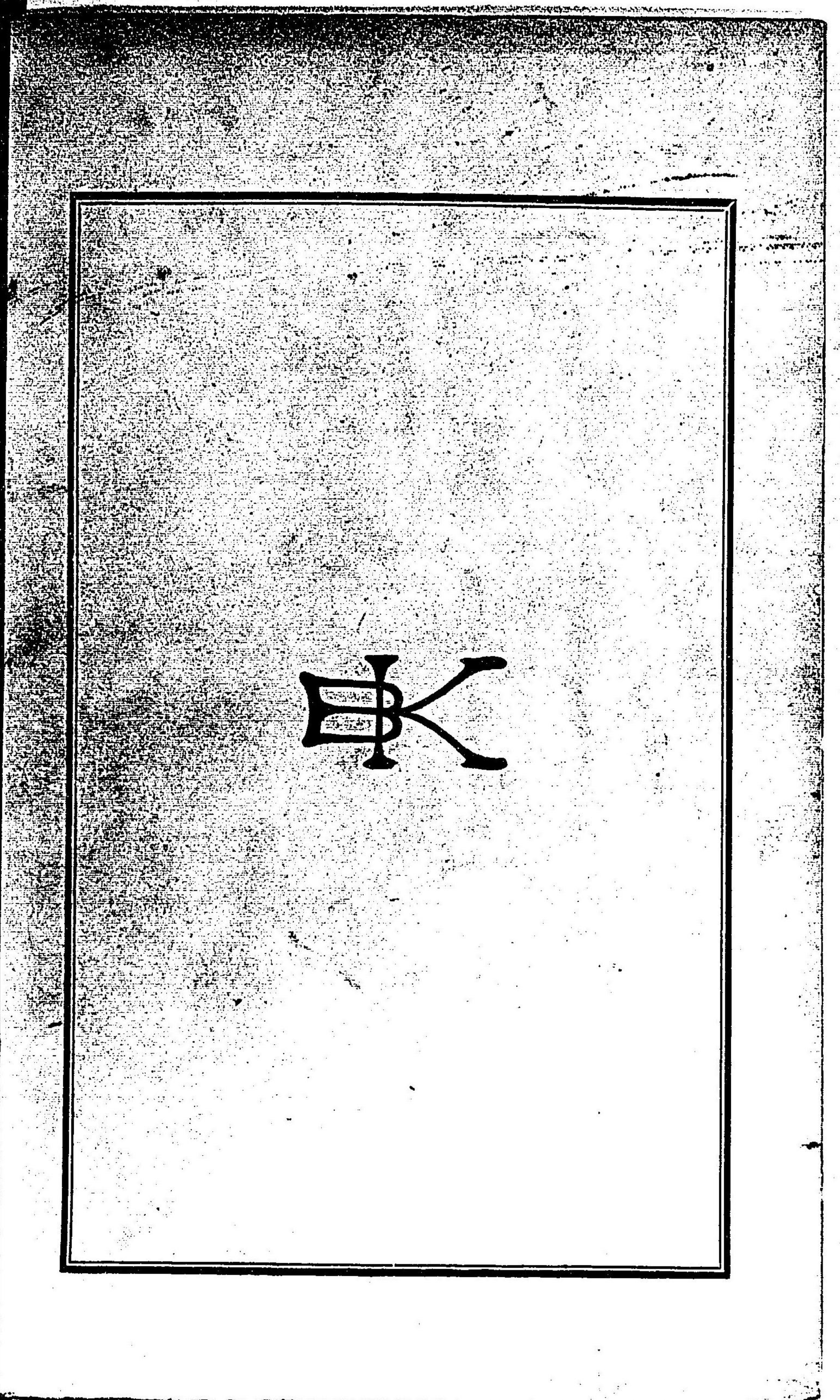
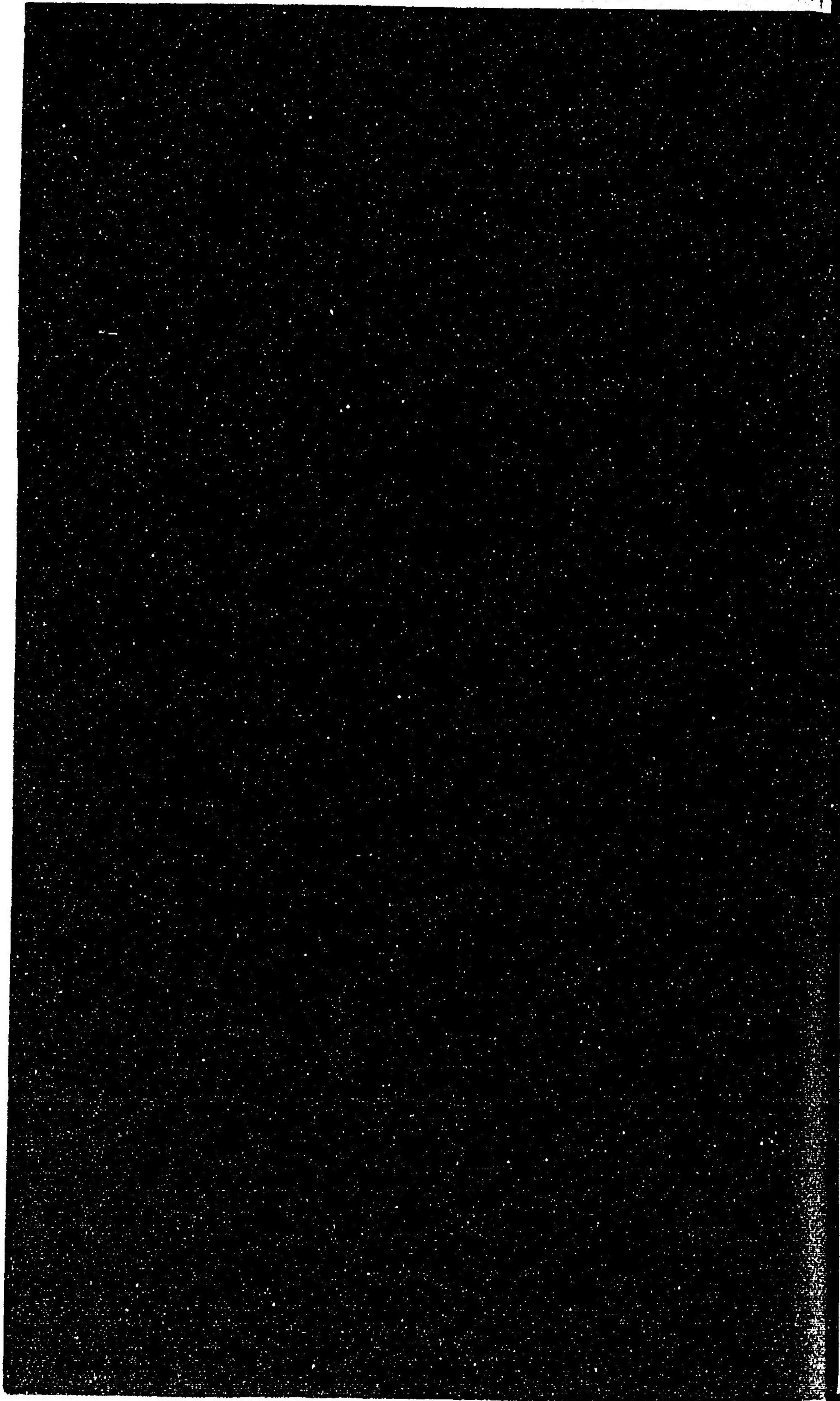
代表者 右社長 原亮一 郎
東京市下谷區龍泉寺町四百十四番地

印刷所 帝國印刷株式會社
東京市京橋區築地三丁目十五番地

賣捌所 各府縣特約販賣所

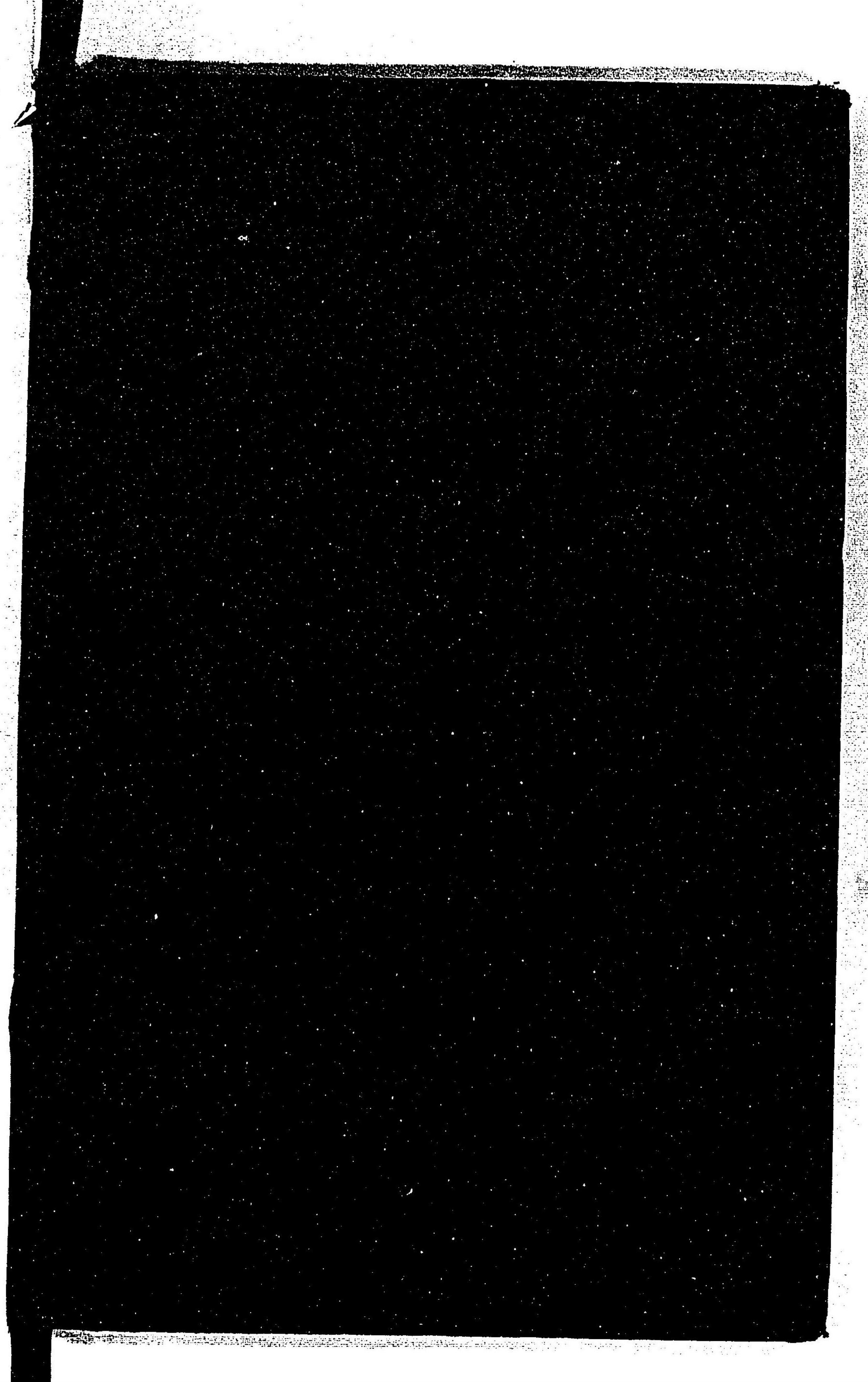
不許複製

45
403



卍

45
403



013605-000-2

45-403

宗教家大会集報一時局に対する宗教家の態度

大日本宗教家大会事務所／編

M37

ABA-0074



